

『アーサー・ラザフォード氏の揺るぎない愛情』

著：名倉和希

ill：逆月酒乱

成田空港からフィンランドのヘルシンキ・ヴァンター国際空港までは、約十時間かかる。

「トキ、疲れた？」

着陸後、ベルト着用のランプが消えたと同時に、つい「ふう」と大きなため息をついてしまったせいだろう。隣に座っている恋人に声をかけられた。

「アーサー」

栗色の髪と瞳の端正な顔立ちの男が、そっと手を握ってくる。トキ——坪内時広はその大きな手を握り返した。

アーサーは百九十センチ近い長身の持ち主で、長い手足はビジネスクラスの座席にギリギリおさまっている。百六十五センチしかない時広よりも、長時間のフライトは確実に疲労をもたらしているだろうに、優しい恋人はいつもこうして気遣ってくれるのだ。

「大丈夫。そんなに疲れていないよ。やっとフィンランドに着いたんだって、ホッとただけ」

「そうか、ならいい。ヘルシンキで観光がてら二泊する予定だから、ゆっくり寛ごう」

「うん、楽しみ」

時広は頷きながらシートベルトを外して立ち上がった。実際、そんなに疲労は溜まっていな
い。JFK国際空港から成田空港までよりもフライト時間は短いし、ファーストクラスのシートはとても座り心地が良かった。

当初、バカンスは同じ北欧でもノルウェーで過ごそうとしていたのだが、アーサーの母親が所有しているというそちらの別荘は、妹の家族がすでに使用していることがわかり、フィンランドのコテージに変更された。時広としては、違いがわかるほど北欧の知識がないので、アーサーとのんびりできるなら、どこでもいい。

飛行機の中では、ちょっと、恋人がモテ過ぎて面白くない部分があった。

アーサー・ラザフォードはモテる。ハンサムで男性モデル並みにスタイルがいいうえに、高学歴高収入のエリート。実家は裕福だから、育ちの良さが滲み出ている。派手ではないが一目で高級とわかる休日セレブっぽいファッションに身を包み、動作はどことなく優雅。そして三十一歳の男盛り。これでモテないわけがない。ゲイだとカミングアウトしていて、時広と出会うまでは何人もの男性と付きあってきたようだ。

搭乗している男女CAたちに、アーサーはモテモテだった。最初は女性CAが笑顔を振りまきに来ていたが、そのうち男性CAばかりが座席に来るようになった。たぶん連れの時広がただの友人ではないと気づいたのだろう。何度かこっそりと睨まれたので、鈍い時広にもそれがわかった。

アーサーと一緒にいると、こういうことは珍しくない。小柄で冴えない容姿の時広が、どうしてイケメンエリートのアーサーの恋人なのか、疑問に思われるのだ。

時広自身、いまだにその点が不思議だ。

アーサーの愛情を疑っているわけではない。彼はいつも真摯に愛を囁き、抱きしめてくれる。時広も素直にそれを受け止めて、愛を囁き返す。こんなに幸せでいいのかな、と怖くなる時があるくらいだ。

出会ったのは去年の七月。もう一年以上が過ぎた。恋人になったのはその二カ月後だったから、もうすぐ一年になる。

真夏の東京で出会い、秋から冬、春にかけて都内のホテルで暮らしながら愛を育て、今年の五月にアーサーの転勤に伴いアメリカのNYに移り住んだ。海外暮らしも、恋人との同棲も、なにもかもが初めてで、時広はアーサーに支えてもらいながら経験を重ね、ひとつずつ覚えていっているところだ。

そして、時広にとって、生まれて初めて恋人と過ごす夏の長期休暇——バカンス——が、始まろうとしている。

なんだかんだとフィンランド入りするのが当初の予定より遅れてしまい、待ちに待ったバカンス。アーサーと二人きり、湖畔のコテージで過ごすことになっている。

もともとは、夏の休暇に入ってすぐフロリダにいるアーサーの両親に挨拶しに行き、その後、北欧で避暑をする予定だった。

直前になってからアーサーの従弟であるリチャード絡みで初めての大きなケンカをしてしまい、時広は一人で日本に帰った。アーサーが追いかけてきてくれてすぐに仲直りできたのだが、その時点でかなりスケジュールが狂っている。

これからどうするか——と相談しようとしていたところに、時広に興味があって待ちきれなかったらしいアーサーの両親が日本に渡ってきてくれた。無事に対面を果たし、これから北海道へ避暑に行くとしたアーサーの両親に、リチャードも含めてみんな一緒に行かないかと誘われた。しかし時期が時期だけに飛行機のチケットが人数分取れず、アーサーと時広は同行を諦め——最初からアーサーは両親との北海道行きには難色を示していた——東京都内のホテルで何泊か過ごした後に、北欧へ向かう飛行機に乗った。

高校の英語教師として働いていたくせに、この年になるまで日本から出たことがなかった時広にとって、フィンランドはまだ二国目の外国だ。しかも人生初の夏のバカンス。時広の中で、アーサーと二人きりで過ごすフィンランドの夏への期待がどんどん高まってしまい、その結果、着陸したときに「やっと着いた！」という安堵のため息が零れてしまったのだ。

国際線ターミナルで一通りの手続きをすませ、二人は外に出た。

「わぁ」

青い空が美しい。昼間で快晴だというのに空気はさらりと乾いていて、やはり東京の夏とはぜんぜん違う。八月の平均気温は二十℃くらいだとガイドブックに書いてあったので、時広はしっかりと羽織り物を荷物に詰めてきた。

「タクシーで移動しよう」

アーサーに先導されて、スーツケースを引きながらタクシー乗り場へ向かう。ヘルシンキ市内までは車で三十分くらい。中年男性のドライバーにホテル名を告げているアーサーの横で、時広は子供のように胸をときめかせながら外を眺めていた。

見るものすべてが新鮮で胸がドキドキする。看板ひとつとってもデザインがお洒落に見えるし、明るい色に溢れていた。北欧は冬が長くて寒さも厳しい。日照時間は短くなる。だから短い夏をととても大切に心から楽しむらしいので、カラフルな色で飾るのかもしれない。

車窓からの眺めをもっと堪能したかったが、道路は渋滞しておらず、タクシーはスムーズにホテルに到着してしまった。

「わあ」

またもやここで感嘆の声が漏れてしまう。アーサーが予約したヘルシンキ市内のホテルは、とても豪華できらびやかだった。自分だったら恐れ多くて選びそうにない、おそらく星が四つか五つはつくようなところではないだろうか。

タクシーのトランクからドライバーがスーツケースを下ろしてくれた。アーサーがさりげなくチップを渡しているのに気づき、あまりにもさまになっている姿に「カッコいい……」と率直な感想が口から零れた。

そういえば、アーサーと恋人になってから半年以上も都内のホテルで暮らしていたが日本国内だったし、NYに移ってからは賃貸の高級アパートメントだったのでチップは特に必要ではなかった。こんなふうにアーサーが慣れた動きで渡しているのを目の当たりにするのは初めてかもしれない。

自分もいつかアーサーのように自然な動きでチップを渡すことができるようになるのだろうか。そんな子供みたいなことを考えながらぼんやり見ているあいだにホテルのドアマンがやってきて、荷物をホテルエントランス内に運んでくれた。

「トキ、おいで」

アーサーに手を引かれて建物の中に足を踏み入れた。都内で泊まっていたホテルも充分高級だったが、こちらはまた重厚感があって、デザインや色彩が北欧っぽいように見える。詳しいわけではないのではっきりとは言えないけれど。

フロントのカウンターでアーサーがチェックインのためにマネージャーらしきホテルマンとやり取りしているあいだも、時広はぼんやりと横に立っているだけだ。全部アーサーがやってくれる。それに慣れきってしまっていることがいけないような気がするが、アーサーが率先して面倒事を引き受けてくれるのは、たぶんもともとリーダーシップを取りたいという性格なのだろうなと思うから口出ししないことにしていた。

そもそも、カウンターの位置が高い。北欧の人たちは総じて身長が高いらしいので、そのせいだろうか。時広が背筋を伸ばして立っても、肩から上しか出ないのだ。書類にサインしようとしたら、背伸びをしなければならない。

女性はどうするんだろう——と時広が疑問に思っていると、すぐ横に椅子に座ってサインできる場所があることに気づいた。車椅子使用の客もいるだろうから、それは当然かもしれない。

ふと、カウンター奥に控えているホテルマンと目が合った。すらりと背が高い、アーサーくら

いの年代の人だ。にっこり微笑まれて、時広も笑顔を返した。

「こんにちは。どれがいい？」

英語で話しかけられながら差し出されたのは、小袋に入ったいくつかのキャンディ。袋のデザインから、中身がオレンジやグレープなどのフルーツ味であることがわかる。時広はしばし呆然とした。これはもしかして、子供と間違われているのだろうか。

どうしよう、と困惑してアーサーを見上げれば、苦笑いしている。

「私のパートナーに気を遣ってくれてありがとう。彼だけでなく、私もひとつもらってもいいかな？ 長いフライトで疲れているから」

アーサーが時広の腰に腕を回しながらそう言ってくれた。

「トキ、彼らに自己紹介して」

アーサーに促されたので、時広は名前を名乗った。ついでに年齢も。二泊する予定なので、アーサーとまったくセックスしないとは限らない。時広が子供だと誤解されたままでは通報される可能性があった。

時広の年齢を知り、フロントにいたホテルマンたちがみんな目を丸くする。だがすぐに笑顔に戻って、アーサーと時広にひとつずつキャンディを渡してくれた。

そんなことがあったせいか、上階の部屋に二人きりになれたときは、またため息が零れてしまった。

「アーサー、僕ってそんなに子供っぽい？ NYの生活で年相応に見られないことには慣れてきたつもりだけど……」

「大丈夫、私はトキが子供ではないことを知っている。だいたい、子供とはこんなことはできないだろう？」

たった一歩で間合いを詰めてきたアーサーに抱きしめられた。時広も両腕をアーサーの広い背中に回し、ぎゅっとしがみつく。すでに馴染みきっている逞しい腕と厚い胸板の感触に、ホッとする。

「ああ、何時間ぶりだろう？ フライト中ずっと、こうしてトキを抱きしめたくてたまらなかった」

「僕も、アーサーに触れたかったよ」

都内のホテルをチェックアウトしてから今まで、まだ丸一日もたっていない。それなのに、時広はアーサーに飢えていた。アーサーが会社に行っているあいだ、もっと長い時間触れあえないことなどざらなのに。

「すぐそばにいるのにキスできないのは、もはや拷問に近い。トキ、せめて軽いキスくらいは許してほしい」

アーサーの懇願口調に折れてしまいそうになるが、ここはやはり譲れない。根っからの日本人である時広は、たとえ触れるだけのキスでも人前ではすべきでないと思うからだ。

「君は私とキスしたくないのか？」

「したいよ。したいけど、やっぱり、人が見ている前では、躊躇いが……。はしたないことだと思ってしまうし」

「まったく、私の恋人はシャイ過ぎる。でもそんなところも愛しいのだから、私もいい加減、重症だ」

アーサーの長い指が顎にかかり、上を向けられる。優しく微笑んだ唇が降りてきて、時広のそれに重なった。ちゅっと柔らかく吸われ、心地良さにうっとりする。何度か吸われたあと、舌が口腔に入ってきた。時広も舌を差し出して、ゆったりと絡める。

飢えて乾いていた体が少しずつ潤っていくような気がした。

舌を絡め、上顎をくすぐりあい、舌先を甘噛みする。官能の波がじょじょに全身に広がってきて、時広は背筋を震わせた。

こんなくちづけもすべて、アーサーが一から教えてくれた。

時広はなにも知らなかった。まっさらだった時広は、アーサーになにもかもを教えてもらった。つまり、アーサー好みのセックスを仕込まれた。これが一般的に良いことなのか悪いことなのかかわからないが、時広は自分の体で愛する人が快感を得てくれるなら、これ以上に幸せなことはないと思っている。

「んっ……」

痛いほどに舌先を吸われて、腰からふっと力が抜けた。立っていられなくなった時広を、アーサーの腕が支えてくれる。軽々と横抱きにされて、ベッドに運ばれた。覆い被さってくるアーサーの瞳が優しい栗色から野性的な琥珀色に変わっている。光の加減や感情の高ぶり具合によって微妙に変じるアーサーの瞳が、時広は大好きだった。

首筋に熱い唇が押し当てられる。彼の手が時広のシャツをめくり上げようとした。

「アーサー、するの？」

「ダメか？」

「ダメじゃないけど……観光は？」

「あとで出かけよう」

あとって、いつ？ 問いかけようとしたが、シャツの中に入りこんだ大きな手で腹から胸を撫で上げられ、時広は「あっ」と息を呑んだ。

「隣に座っている君に触れることができず、十時間も指をくわえて見ているしかできなかったんだ。今ここでトキをチャージしないと、私は干からびてしまうよ」

そんなことを言われてしまったら、抵抗なんてできなくなる。元から抵抗する気はないけれど。

「でも、出発直前まで、してた、のに……っ」

ちゅう、と乳首に吸いつかれ、時広は悩ましく腰をくねらせた。一年近くかけてアーサーにいろいろと教えこまれた体は、ちょっとした愛撫にもすぐ反応するようになってしまっている。

「それはそれ、これはこれだ」

長時間のフライトに向かうのだから、とホテルをチェックアウトする直前まで、時広はアーサーに抱かれていたのだ。確か、干からびないようにチャージさせてくれ、とか言われて。

どうやらアーサーは満タンにチャージしても消費が激しくて、わりと早く空になってしまうらしい。

アーサーの指が時広のズボンのボタンを外したところで、ハッとした。

「あ、ちょっと待って。シャワー浴びたい。ずっと飛行機の中だったし……」

「あとで一緒に浴びよう。今は、このままでいい」

「でも——」

「君はきれい好きだからいつも気にするが、そのたびに私は『君の貴重な体臭を洗い流さないでくれ』と言っているだろう？ 私は君の体臭が大好きなんだ。それなのに、トキはほとんど体臭がないうえにきれい好きで朝晩シャワーを浴びる。私は体臭も含めて君のすべてを愛でたいのに」

アーサーは大真面目な顔で変態ティックなことを言う。確かに時広は風呂好きだ。日本人のほとんどがそうではないだろうか。国民性を抜きにしても、セックスの前に体を清めるのは普通のことだと思うのだが、アーサーは否定的だ。

かといって、アーサーが不潔なわけではないし、不衛生なままでの行為を望む嗜好があるわけでもない。シャワーを使わずに時広がアーサーの性器を口腔で愛撫しようとするのを制止するのだから。

以前、過去の恋人たちにも同じようにシャワーの使用を制限していたのかと問いかけたことがある。アーサーは呆れた様子で、「セックスの前には、必ずシャワーを使わせていた。あたりまえだろう。不衛生じゃないか」と当然のように答えた。

つまり、時広だけ特別のようだ。アーサーはなんの疑問も抱いていないようだけれど、時広には不思議でならない。どうして自分だけ特別なのか。

時広はアーサー以外に付きあった経験がないから、ほかの男性とセックスした場合はどうなのか、比べることができない。

「トキ、こちらに集中して」

いつものごとく、アーサーは手際よく時広の下半身からするりと衣類を取り去ってしまった。もう何度も抱きあっていて今さらだとわかっているけど、人として秘めておくべき大切な部分を晒すのは恥ずかしい。股間を手で隠したい衝動に駆られるが、我慢した。そんなことをすると、たいていアーサーに叱られるからだ。

体を見ているのは恋人で、いつまでも恥じらっているのは変かな、と我ながら思う。でも羞恥心はなくならなくて——。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>